絵本の中から中学生！？

高坂桐乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絵本の中から中学生！？

【Ｎコード】
Ｎ９６７２Ｃ

【作者名】
高坂桐乃

【あらすじ】
マゼンダはごく普通の中学生。ある日、絵本からイケメンが飛び出してきて！！！

テストデー！？

「テミ～～おはよう♪」

この人はマゼンダ。
主人公ではないが親友。

「おはよう・・」

この人がテミ。
主人公だ。
昨日から徹夜で勉強していた。

「どうしたの？？元気ないじゃん！！」

そう。テミは眠いのだ。
１日１０時間寝るマゼンダと１日３時間寝るテミでは全然違うのが分かるだろう。

「眠いの・・昨日も３０分しか寝てない・・」

テミは打ち明ける。
３０分しか寝てないとは作者にとってはあり得ない事だ。

「うっそ～～私は昨日１１時間寝たよ。」

１日の半分を寝る時間にするマゼンダも凄い。

「いいねぇ。今日はテストデーだよね。」

この瞬間。マゼンダの顔が引きつった。

「そ・・・そうだっけ～勉強してないや。」

マゼンダが勉強していない事を最初から知っていたテミ。
そんなこんなで学校に着いた。

「ではテストを始める。スイッチオン！！」

こいつはオーガー。女子が言うには『臭緒』
近くによると臭いらしい。
後スイッチオンと言うのはこの国はお金持ちなため、
スイッチを押すと机の両端に壁が出てくるのだ。

「めんどくせぇな。」

この人はブルース。
めんどくせぇ。が口癖。

「ではスタート！！」

「簡単♪」

「分からないよぉ。」

と正反対の二人だが。
テストはどうなったのだろうか。

テミは全部１００点。
マゼンダはほとんどが３０〜５０点。
中には〇〇点の人も！！

イケメン少年★登場！？

「終わりましたねｖｖ」

授業が始まると元気になるテミ。
マゼンダはやる気を無くしたようだ。

「うん・・・」

「では、今日は帰っていいですよｖｖ」

と言う事なので帰る。
テミは１人（マゼンダとは違う道）で道を歩いていたら
小さなお店があった。

ガラガラガラ

？？？「いらっしゃいませぇ。」

と誰か分からない人が迎えた。

「こんにちは。」

そこにはいくつもの絵本が並んでいた。

？？？「えぇっとねぇ。いろいろあるから好きなのを取りな」

そう言われたのでテミは「灰色の泉。」という本をとった。

「これ。いいですか??何円ですか??」
???「３００円だよ。」
それを払うとテミは出ていった。
その店を明日、マゼンダに教えようと
振り向くともうそこにはお店はなかった。

「変だなぁ。」
とテミは思っていた。
でも確かに手には本をしっかり持っている。
「まぁ。いいか。」
とテミは家に帰った。
テミの家はまずまずだ。
家の中の１０分の１は漫画だ。
母が漫画家だからでもある。
「ただいまぁ。」
「おかえりなさい。」
そう言うとテミは母のために紅茶を入れる。
クッキー付きで。

「どうぞ。では私は部屋に行ってます。」

そう言うとテミは部屋に行った。
テミの部屋は広い方。
5人兄弟の長女だから。
まぁ。家族としては4番目に年がうえ。
父、母、兄、テミ、妹×3である。

「ふぅ。物語でも読んでみるか。」

その中身はこんな話だった。
（平仮名です。小さい子も読めるように。）

あるところに　おばあさんとおじいさんが　すんでいました。
おじいさんは　ももを　わるのが　とくいでした。
おばあさんは　りょうりを　つくるのが　とくいでした。
そこに　ちいさな　おとこのこが　うまれました。
そのこは　くろう。　となづけられました。
くろうは　とってもかわいがられて　いました。
そのこが　ちゅうがくせいに　なったとき、
わるいまじょがきて　そのこを　どこかに　ふういん
してしまいました。
そのこは　いまでも　みつかっていません。
これは　ほんとうの　おはなしです。

「何これ??こんなお話あるわけないじゃん。」

この瞬間だった。
テミが持っている本が揺れた。

「な・・・何これ??」

「な・・・何なの〜〜」

「こんにちわ。マイハニィィ」

と見知らぬ男が窓枠の所にいた。

「だ・・誰??」

「あぁ。俺か。俺はクロウ。この物語からきたんだぜ。封印を解いてくれた君。」

テミはキョトンとしていた。
それはそうだろう。
急に男の子が窓に座っていたんだから。

「も・・・もしかしてこの物語??」

とテミは恐る恐るその本を持った。

「もちろんそうに決まっているじゃん。よぉし。お金よ出てこい！！」

そう言うとクロウの手にはお金がザックザクだった。

「何で??お金が!!」

ちなみにクロウの服装は昔風な服だった。

「まぁ。気にしないで。じゃあ買ってくるから。」

そう言うとクロウは行ってしまった。

イケメン少年★登場！？（後書き）

主人公はマゼンダの予定でしたがテミに変えました。

コスってマイハイオニー！？マイハニィのテミ

そして３０分後戻ってきた。

「ただいま♪マイハニィ。」

クロウはさっきからテミの事をマイハニィ。と呼ぶ。
何故だろうか？？

「だから私はマイハニィ。ではないから。テミです！！」

「まぁ。気にしないで。」

そうするとクロウは何か呪文を唱えた。
すると部屋の中にもう一つの部屋が出来た。

「何これ！？？」

テミが質問するとクロウは
『テミと俺しか見えない部屋さ。』

と答えた。

「まぁ。俺は出したい時にご飯が食べられるから。」

と言い、お菓子を出した。
テミにも食べるように勧めたがテミは嫌がった。

「ダイエット中なんだから。食べられない。」

「まぁ。いいや。」

そうするとテミはご飯を作りにキッチンへ向かった。
そしてご飯を作りはじめる。

「いつも有難うね。」

と母の励ましもあり、ハンバーグを作った。
そして兄弟４人で食べる。
もちろんテミと母は食べない。
テミはダイエット中、母は漫画を書き中。

次の朝になる

ハレ晴れ不快！？クロウが中学校へ

そして朝〜〜

「行ってきます。」

とテミは元気がなさそうに言う。
それの理由は昨日夜中中クロウとゲームをしていたから。

「行ってらっしゃい！！」

と母が見送る。
何とか昨日で漫画が完成したようだ。

そして学校〜〜

「おはよう♪テミ。」

とマゼンダが声をかけるが
テミはボーッっとしている。

「あぁ。おはよう・・」

とテミは妙な挨拶をする。
マゼンダは不思議そうにも先生のところへ向かった。

「おはよう。テミ。」

この子はティンク。

今の悩みは小さい事だ。

「おはよう・・・」

とテミはまた元気のない声で挨拶をする。

そしてチャイムが鳴った。

「ほぉ。やっとのんびり出来る……」

テミはのんびりしていた。

寝る時もあったが。

「今日はバカ緒が休みなので代わりが私です。（あっ。しまったぁ）」

「バカ緒ってオーガー先生ですか??」

ブルースが言った。

コボルトは頷いた。

「転入生が来ています。入っておいで。」

転入生・・・

この瞬間。

テミの顔が引きつった。

「こんにちはぁ。クロウと申しますｖｖマイハニィ。」

クロウだった。
やっぱり。と言う顔をしていたテミ。
しかもマイハニィ。と言われたので
クラスの女子は勘違いし、目が全員ハートになった。
（テミ以外）

「マイハニィ。会いたかったよ・・」

そう言うとクロウはテミに抱き着いた。
しかもその時にキスをしてしまった。

「ふんぐふんぐ！！（やめなさいよ）」

みんなは唖然としている。
口をポカーンと開けている。

「て・・・テミ・・・す・・凄いね。」

この瞬間。
先生が飛びついた。

「いくらラブラブだからって離れなさい！！クロウ君の席はあそこよ！！」

とクロウはテミと全然離れた席になった。
テミ派の男子はホッとした。

幽霊のなく頃に！？心霊スポットの話

先生からの急な発表だった。

「そーいえば、今日から修学旅行でしたね。みなさんの荷物などは学校で全部用意しましたよ♪」

みんなは慌てた。

まぁ。準備がしてあると言う事なので少しはホッとした。

「わぁ。移動教室かぁ。楽しみ♪」

マゼンダが叫ぶ。

そして背の順に並ぶ。

テミは前から１０番目だ。

「背がもう少し高くなったらなぁ。」

とテミは願う。

叶うはずもない願いだが。

「ではバスに乗ります♪席は背の順で男女別々でね。」

と言う事だったので前の背の順のマゼンダと隣になった。

バスの中〜〜

「ねぇ。いつの間にクロウ様と知り合っていたの？？」

マゼンダがテミに聞く。

「昨日。」

テミはあっさり答えた。
マゼンダは驚いたが違う話になった。

「あのさ、１週間の修学旅行だけどさ。肝試しはないんだって。」

マゼンダの話にテミはホッとする。
テミはお化けが嫌いだ。

「よかったぁ。」

「でも心霊スポットの洞くつに男女２人ずつで回るんだってよ。」

この時、テミは雄叫びをあげた。

「きゃぁぁぁ〜〜」

と叫んだのでクラス全員がテミの方を向く。
テミは「何でもないですｖｖ」
と言うとみんなはもとに戻った。

「やめてよぉ。マゼンダ！」

「ごめんごめん。」

そして心霊スポットに着いた（昼間から。）

「先生！！何故心霊スポットに昼間から行かなくちゃいけないんですか？？」

「幽霊が恐い人がいるでしょ？？後昼間でも出るって聞いたから♪」

この瞬間。
みんなの目がテミにうつった。
テミはそっぽを向いていた。

「では背の順の前から男女2人ずつ行って下さいなｖｖ」

と言う事なので最初のメンバーが行ってしまった。
いった後には「きゃぁ～」などの声が響いた。

「楽しみですｖｖ」

それは本当かと思うマゼンダ。

「そ・・そうだね。」

マゼンダはテミが叫ぶ声が恐ろしく思ってきた。

「では次の人。」

とどんどん入っていく。

テミ達は前から5番目。
後ろから5番目ある。

「次の人。」

そんなこんなでテミ達の番になった。

「では行ってらっしゃい～～」

と出発した4人。
メンバーはマゼンダ、テミ、少年A（前原圭一）、少年B（北条サトシ）であった。
少年Aはテミの事が好き。
だから背の順でよかったと思っている。

修学旅行!?ローゼンメイデンの人魚のドール

「よぉし。出発進行!!」

とマゼンダのかけ声があり、
中に入った。

「恐そうですね・・・・」

その時だった。

「こ・・・・・ん・・・・・に・・・・・・ち・・・・・・は・・・・・・・・・」

と変な声がしたのだ。

少年B「誰ですか??変な声を出すのは。」

「こ・・・・こ・・・・で・・・・・死・・・・・ん・・・・・だ・・・・・子・・・・供・・・・・で・・・・・す・・・・」

「えぇ。何処にいるの??」

#「ここです♪こんにちは。」

と金髪の男の子が出てきた。
テミは嬉しそうに近寄った。

「可愛いぃ。何歳なの??」

＃「6歳です。ここで両親と共に死にました。」
と平気に発言する、金髪の少年。
そこで4人はこの洞くつには両親もいることを。
「そ・・・そうなのねっ。名前は??」
＃「僕、ファンタ。もちろん女だよ。」
この時4人が。
少年A少年B「えぇ〜」
と叫んだ。

「そうなの??」
＃「そうだよ♪いっつも男に間違われて大変だったんだ♪」
少年A「ところで出口は何処ですか??」
少年Aが恐る恐る聞いた。
ファンタはすぐに答えた。
＃「すぐそこだよ。でも気を付けてね。」

４人は気を付けての意味が分からないまま進んだ。

一方変わって外。

「じゃあ進んでいいですよ。」

「テミ、中に入っちゃったしなぁ・・・そうだ！！」

クロウは何かを思い付き、魔法を唱えて消えた。

また戻って洞くつの中～～

「あれ？？ここに扉があるよ。」

とテミが見つけた。

みんなが見てみるとなぞなぞが書いてあった。

『黒い鳥は何って言うんだぁ。』

それはまぎれもなく、子供の字だった。

４人は『ファンタが書いたんだ』と言うことがすぐに分かった。

しかもその下に

『答えられたら扉がもう一つでてきて、それが出口だよ♪でも間違えたら・・・』

と書いてあった。

「この答え・・簡単だよね・・カラ・・・」

「スズメ！！」

マゼンダが言い終わらないうちにテミが間違った答えを言ってしまった。

すると急に下に穴が開いた。

「きゃぁぁ～」

と二人だけが落ちていった。
そして着いた場所は・・・・

＃「いらっしいませ。」

と少し間違えている言葉を話す人だった。

「はぁ。こんにちは??」

「ここ、何処ですか??」

＃「人魚界だけど。だから海のそこ。」

テミ達は海のそこに来ていた。

帰還車トーマス！？魔法で飛ばされたマゼンダ達

「そうですか。」

テミとマゼンダは不思議に思った。
何故水の中なのに息ができるのか。

「何故息ができるのですか？？」

＃「そりゃ～ここらの物は皆意識不明の人間だからさ。何とかして改良して息ができるようにさせたんだよ。」

「そうなんですかぁ。」

この時、テミとマゼンダは『意識不明』に困っていた。
この人も意識不明なのかって。
もしかしたら私達もか・・と思っていた。

「私達は？？」

＃「ただここに来ただけよ。」

この言葉にテミとマゼンダは喜んだ。

＃「しばらくゆっくりしていきなさい。」

と言うことなのでゆっくりしていくことにした。

「探検しようか。」

テミの一言で探険することになった。
ここには福屋・服屋・料理屋などいい店が沢山あった。

「わぁ。洋服屋行こう♪」

と言うことなので洋服屋に向かった。

#「いらっしいませ。」

とまた間違えて言う。
そこの洋服屋にはマーメードドレスが置いてあった。

「わぁ。きれい。」

「本当だねぇ。」

#「ただであげるよぉ。」

と二人は見事マーメードドレスをゲット。

「有り難うございます！！」

と言って次は福屋に向かった。

#「いらっしいませ。」

またもや間違える。

「ここってどんな所ですか??」

#「くじやだよ。」

なのでくじを引いた。
それは二人ともあたっていた。

「当たったぁ〜」

#「おめでとうございます。」

と言った途端、二人は魔法をかけられた。
テミとマゼンダは魔法

「きゃ〜〜〜」

ドスッン
テミとマゼンダが落ちた場所は、さっき落ちた場所だった。
しかもさっき貰った、ドレスも持っていた。

少年A「無事だったんですか!?二人とも。」

少年B「では行きましょうか。」

と言うことでまた出発した。
その直後だった。

「ばぁ。」

とクロウが急に現れたのだ。
「生きてる幽霊だぁ。」
とみんなは叫び出した。
「じゃあね。」
そう言うとクロウは消えた。
本物なのにね。
「恐かったぁ。」
とまた歩き始める。
何匹か幽霊を見かけたが見てみぬ振りをした。
そしてゴールに着いた。
「5班ゴール。」
と先生はメモした。
少年A「やっと着きましたね・・・」
この班はもうボロボロになっていた。

とらいあんぐるハート！？テミの父の虐待とミドリとルファ！

「では終わった班はバスに乗っていて下さいね。」

と言われたのでみんなはバスに戻る。
そしてテミは携帯を取り出す。
中学生で持っていることは珍しいらしい。

「お母さんにメール送ろう♪」

そうテミの家ではお母さんから1時間に30回のメールが来るのだ。
だから授業中に見ないと
『メールボックスがパンパンです。』
と物凄い音で言うので大変だ。

修学旅行だともっと凄いのでメールを送る。

「ねぇねぇ。さっき携帯でとった写真を送れば？？」

とマゼンダが提案したので送ってみる。
そしたらすぐに返事が返ってきた。

『やばいじゃん。左上に変な人魂が写ってるよ』

そういわれて見てみると本当にあった。
くっきりと白い影が。
そのせいで携帯には心霊写真が入っている。
消去出来ないとか。

大変らしい。

「まぁ。いいや。思い出だし。」

と言うことだった。

「部屋は適当でいいです。」

と先生は言ったのでみんなは好きな部屋に行った。

花部屋・水部屋・草部屋などいろいろ。

「私、水部屋行こう♪」

とテミは水部屋にミドリと共に向かった。

「楽しみだねぇ。」

と入ったら・・・・

水が下にあった。

だから地べたに座れない。

「楽しそう♪」

ちなみに男女一緒の部屋。

だけど着替える場所は別々。

「こんにちはぁ。ってマイハニィVV」

とクロウが飛びついてきた。
でもテミは避けた。

「そんな呼び方で呼ぶんじゃねぇ。」

テミが切れて、クロウを殴った。
しかしクロウは平気な顔して避けた。

「テミを虐めるなぁ。」

ミドリが叫んだ。
一応、この部屋になってしまった。
ちなみにクロウと一緒にきたのはルファだ。

「まぁまぁ。落ち着いて下さい。みなさん。」

となんとか落ち着いた。
テミはもう疲れたらしい。
もう寝てしまった。

「夕食食べてこよ♪」

ミドリは無理矢理クロウとルファを連れていった。

へんてこ結び×テミ!?灼眼の古い師

そして夜中〜〜

「はぁ。お腹空いたなぁ。」

とテミは呟いていた。

その時だった。

「スラスラァ〜」

とスライムが襲ってきた。

「何処入ってんのよぉ。」

とテミはスライムを殴り飛ばした。

その時だった。

クロウがやってきたのだ。

「お見事♪ミス・テミ♪」

「もしかしてあんたがやったの??」

クロウは頷いた。

テミはまた殴ろうとしたが避けられた。

「まぁ。俺が来た理由を修学旅行が終わったら教えてやるよぉ。」

と言われた。

テミはキにしないでまた寝てしまった。

そして朝〜〜

放送がながれた。

「えぇ〜スライム学園のみなさんは今日は自由時間でございます。
好きなように行動して下さい。」

と言われたのでテミは起き上がり、
マゼンダの部屋に向かった。

「おはよう・・・」

ちなみにテミの髪型は横に一つ結びだ。

「おはよう♪早く行こう♪」

テミ達が向かう場所は、占い屋だ。
将来の事を占ってくれる、当たる占い師がここにいるそうだ。

「何言われるんだろうね♪」

そして向かった。
だがそこは大人気なので、看板に
『最後尾は3時間待ちです。』
と書いてあった。でもテミ達は並ぶことにした。

「ゲームでもしておこうか。」

なのでテミ達は任天堂●Ｓのゲームを取り出し、
やりはじめた。

そしてテミ達の番が来た。

＃「いらっしゃいませ。」

と迎えたのは髪の長い人。
まずマゼンダからになった。

「私、恋の悩みをしてるんです。」

＃「どんな悩みですか？？」

「あの・・私の好きな人が他の人を好きだと言う噂があるんです。」

この時、マゼンダが好きな人はよく分からない

＃「それはね。あきらめた方がいいですよ。告白したその次の日に
不幸なことが起きますから。」

と言われたのでマゼンダは諦めることにした。
あとマゼンダは将来について聞いた。

「私って何歳で結婚するんでしょうか？？また死ぬのって何歳ぐら
いでしょうか？？」

とマゼンダは聞いた。

＃「えぇっと結婚は４０歳。その年に子供が１人。
次の年にもう１人。
彼方は１３６歳で死亡。」

この事からマゼンダは長寿と言う事が判明した。

「ありがとうございます！！」

続いてテミだ。

「あの～私って何の仕事に就くのでしょうか？」

＃「なにも就かないね。就く前に大富豪と結婚しちゃうよ。」

そう言われたテミは喜んでいた。
大富豪と結婚出来るなんて作者の夢の夢だ。

「じゃあ私は何歳で結婚するんですか？？その後は。」

＃「彼方は１６歳で結婚するわ。
ただし１５歳の時に災難がくるわ。
けれど運命の人が彼方を助けてくれるわ。
子供は７人よ。
死ぬのは９８歳。」

１５歳。
それは今年に当たる。

しかもテミの誕生日は来月だ。
なのでその災難がもうすぐ来る。
と言う事だった。

そんなこんなで占い屋は終わった。

ファイナルファンタジー【そして伝説へ】（前書き）

意外と13話ぐらいで終わっちゃうかも

ファイナルファンタジー【そして伝説へ】

「あの占い、どうなんだろう・・」

テミはマゼンダに言った。
マゼンダは『気にする事ないよ。』と言った。
だけど本当に気にしているのはマゼンダだ。
『４０歳で結婚』と言うのが頭から離れないのだ。

「まぁさ。写真屋行こう♪」

と言う事なので写真屋に向かった。
写真屋は持ってきた服を着て、写真を取る。
それを好きな風に落書きができる。

「いらっしゃいませ。服は彼処で着替えて下さい。」

と二人は着替えた。

「わぁ。こんな感じなんだぁ。」

ちなみに背がマゼンダ１５７、テミ１６３で少し標準より少し高い。

「お洒落ですねぇ。そんな服、見た事ないですよｖｖ」

それはそうだ。
この服は海の底で貰った物だったから。

「では取りましょうか。」

と写真をとった。
二人とも可愛く写っていた。
「ありがとうございます！！」
「嬉しいですｖｖ」
と二人はホテルに戻った。

「今日はさ。私の部屋に泊まりなよ！！」
と言う事なのでマゼンダは水部屋に泊まる事にした。
「マゼンダァ。会いたかったよぉ。」
とミドリが抱き着く。
マゼンダは嫌ながらも嬉しがっていた。
「ちぇっ。マゼンダまで来たか・・」
そう言うとクロウは何処かに行った。
何故だろうか。
「はぁ。私達はご飯食べに行こう♪」
とテミが言ったので食堂に向かった。

「お腹空いちゃったよぉ。」
と食堂に着くと・・・・
今日はバイキングだった。
なのでテミ達は好きなのを選びまくった。
「いただきます。旨そうｖｖ」
とみんなは思いっきり食べた。

「美味しかったぁ。」
とテミはため息をつく。（何故??）
まぁ。そんな事はほっておいて部屋についた。
するとウナをやり始めた。
ウナとは1枚になったら『ウナ』と叫ぶのだ。
「ウナ!!」
「ウナ!!」
この試合、マゼンダの勝ち。
その時、クロウとルファが入ってきた。
「俺達も入れてくれェ。」

「いれて下さいｖｖ」

と言う事なのでミドリが許してしまった。

（もしかして・・ミドリは・・）

「わ・・分かったよぉ／／／」

と。

「ウナ」

と次の試合はテミが勝った。

なのでテミはみんなから１００円貰った。

その時、放送が流れた。

『スライム学園のみなさんは明日、運命洞くつに行きますｖｖなので明日は５時起きです』

と。明日は運命洞窟に行くのだと。

だからみんなは早く寝た。

バトル！！！　ブロントＶＳマゼンダＶＳテミ

そして朝になった。
みんなは起きて、洞窟に向かった。

「わぁ。楽しみだなぁ。」

と先生が来た。

「えぇっと今からジャンケンをしてもらいます。
それで順番を決めてもらいます。」

そして決めた。
テミは一番。
ジャンケンは強いのだ。

「やったぁ。ミドリとだぁ。」

テミは2番目のミドリと『ラッキーコース』に行く事になった。

「では行っていいですよぉ。」

ちなみに他のコースは
『まぁまぁラッキーコース』
『ちょっとダメコース』
『まぁまぁダメコース』
『あんラッキーコース』
『超ダメコース』
などに分かれている。

その中でテミはラッキーコースなので最高だ。

「最高ねぇ。」

テミ達の施設は『飲み物・食べ物食べ放題。服をいっぱいくれる、照明はシャンデリアなど。』

いい事でしょう。
次のページはテミ達チーム。

「シャンデリアだぁ。」

「そうだな。ジュースおかわり！！」

とミドリはジュースを15杯飲んでいた。
凄いだろう。と自慢をしていたぐらいだ。

「よくそんなに飲めるわねぇ。」

とテミはしみじみ言う。
それもそうだろう。

「はい。ジュースです。」

「美味しいんだよねぇ。」

とミドリは一気飲みする。

またおかわりだ。
これが永遠に続く。

「はぁ。ゆっくり出来ていいねぇ。」

とテミは呟く。

「そうだよね。」

とミドリが後で腹痛になったのは言うまでもない。

「お腹痛くならないの??」

「大丈夫〜〜」

と次のチーム・・・
そして最後のチーム、クロウとブロントだ。

仲が悪い二人が最悪な場所に!!
さてどうなる??

最悪グループの洞窟は『ジメジメ・ランプ・泥水である』

「何で俺が・・ブロントと・・」

「俺こそ何故クロウと・・・」

二人ともジャンケンに弱かった。
だから同じチームになったのだ。

「ふんっ。あっそうだ！！」

するとクロウは魔法で行ってしまった。
残されたブロントはとぼとぼ歩いていった。

そして移動教室は終わった。

うたわれるｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ！？スクライドの前原カズマ３世

テミは家に帰った。
家に帰るとクロウがいるのが当然の事だ。

「ただいまぁ。」

とテミが帰ってくる。
お母さんは漫画を出しに行っている。
他の兄弟はいろんな事をしている。

「おかえり♪」

とクロウが迎える。
いよいよクロウが来た訳が言われる。

「じゃあ、聞くわよ。彼方は何故私の所に来たの？？」

テミは聞いた。
クロウは静かに息をして言った。

「俺は絵本の中に封印されてたんだ。」

「何で？？」

絵本の中の物語は別人で封印されたと様子。

「俺は、勘違いされて入れられたんだ！！」

クロウの衝撃の告白。
さてその真相は??

「何で??」

「だから、俺はこの絵本の主人公に似ていて、
そいつが逃げて、俺が間違われて入れられた訳。」

「えぇぇぇぇぇ〜〜」

とテミが叫んだ。
凄い叫びかただ。

「何処に住んでいるの??」

「それを今、探している訳。」

クロウから重大な任務を聞いた、テミ。
大変だねぇ。

そして夜になり、寝た。

ちなみにうたわれるｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ。スクライドの前原カズマ３世が絵本の本当の主人公
明日から運動会の練習をする。

この物語にも真相、エンディングが待っている。本当に待っている。
ハンバーグで始まりハンバーグで終わるこの物語。

その名は絵本の中から中学生!?。真実は一つ!!!。名探偵コナンではないのであしからず

アーカード・トグサ！？グリフィスのタバサ（前書き）

グリフィスのタバサはグリフィスの翼と言う意味。
タバサは恐らく雪風のタバサの事を指す。

アーカード・トグサ!?グリフィスのタバサ

そして学校に行った。
昨日、テミはクロウが来た理由を聞き、
探すはめにあったのだ。

「眠い・・・」

とテミは大欠伸をする。
するとマゼンダが寄ってくる。

「おはよう♪今日から運動会の練習だよ♪」

と言ったのでテミは叫ぶ。

「やったぁぁああ〜〜」

テミは走るのが得意である。
実は作者も得意。

「よかったな。テミ。」

とミドリが言ってくれる。
そしてみんなは着替え、校庭に向かった。

「ではリレ選を決めます。」

と先生は早い候補をあげる。
その中にはテミやミドリなどが入っている。

女子と男子は別々だ。
「では行きますよぉ。」
とスタートした。
するとテミは早速目の色をかえ、1着でゴールした。
作者はいつも2番だ。
「やったぁ。」
と選ばれたのはテミ、ミドリ、優香、美里である。
（優）「頑張ろうね。」
と優香が言う。
するとみんなは頑張ろうと言う気持ちになる。

「あと各グループで出る競技を言います。」
とむかで競争、アベック競争、パン食い競争などに分かれた。
テミはアベック競争に並んだ。
それは二人組になり、背中合わせにし、ボールを間に挟んで腕組をして行く。
と言うレース。

「頑張りましょうぅ。」
テミはマゼンダと組む事になった。
「頑張ろうね。」
と二人は練習を始める。
一歩が違う二人がすぐこけて、
顔をぶつけた。
「痛ッ～」
とテミは叫ぶ。
もう一回二人はやる。
すると出来た。
あともう一つ。
3年生にはとってもいい競技がある。
組み体操だ。
これは3年生だけがやる競技である。
「やったね。」
とマゼンダは喜ぶ。
テミも喜びすぎてバク転をした（えっ）
「凄い！！」
とティンクが見に来る。
ティンクもアベックで優香とやる。

（優）「凄いですねぇ。」

優香も驚く。

そりゃ～この学校ではできる人が少ないから。

あと2年生の

組体操。

それは誰だってやってみたい事。

それが今日、できる事になった。

「楽しそうですねぇ。」

といいながらソク転をするテミ。

みんなは『おぉ～』と叫ぶ。

「やっぱ、テミは凄いな。」

とミドリが驚くほどだ。

「天才少女！！テミ。」

とマゼンダが呼ぶとみんなが真似する。

「そんなこと言わないで下さい！！」

とテミは「なんでやねん」のポーズで腕を横にやった。
すると横にはブロントがいて、ぶつかった。

「痛ッ」

とブロントが言う。
テミは凶暴だ。

ちなみに次でＯＶＥＲＭＡＮ

アーカード・トグサ!?グリフィスのタバサ（後書き）

この次でこの物語は終わります。

ＢＬＯＯＤ＋冒険！？鳳凰寺の風を浴びた合い挽き肉がフィナーレを呼ぶ！！！

ヒトって一体なんなのですか？

題名はこれは最終回ですが何かだったが変更いたしました。

ＢＬＯＯＤ＋冒険！？鳳凰寺の風を浴びた合い挽き肉がフィナーレを呼ぶ！！！

アベック競争の練習が終わり、今週は寮の日。
寮は月に１週間ある。
それが今週。

「眠い・・」

ごはんは自分で用意する。
何でもいいのだ。

「ハンバーグ作ろうか♪ｖｖ」

と言う事なのでハンバーグを作る事になった。
本当に美味しいのが作れるのだろうか。

「私も手伝うぜぇ。」

とミドリも加わった。
家庭科室は今、混んでいる。
なので理科室でやる事にした。

「理科室ねぇ。彼処の先生、好きじゃないんだよねぇ。」

とテミは呟く。
誰も理科室に行こうとは考えない。
そして着いた。（材料はもう持っていると言う事で。）

材料
鳳凰寺の風を浴びた合い挽き肉　４００ｇ
野原の玉ねぎ　小２個
最強鶏業界・ブラックラグーン印の卵　適量
大豆で作ったパン粉　適量
スライム牛乳　適量
オックスフォード大学ベーリアル校のバター　適量

「えぇっと玉ねぎを５ｍｍに切る。」

とテミは玉ねぎを切る。

「フライパンにバターを熱し、玉ねぎをじっくり炒める。全体的に半透明になればＯＫ。」

とマゼンダはフライパンを熱した。
玉ねぎがしんなりしてきた。

「ボウルに挽き肉、卵、パン粉、牛乳、あら熱をとった玉ねぎを入れ、塩と胡椒をいれてこねる。」

こんな感じでハンバーグが出来た。
フライパンに残った、肉汁とソース、ケチャップを混ぜてソースを作った。

「いただきます。」

とガツガツと食べ始めた。

明日、運動会だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9672c/

絵本の中から中学生！？

2010年10月13日03時55分発行